

# 英国 18 世紀後半における自然地域を舞台とした観光の展開過程 ——ワイ川下流地域を題材として——

A study of the development process in natural area tourism in Britain  
 : A Case study of the LowerWye Valley in late eighteenth century

橋 本 俊 哉\*

Toshiya HASHIMOTO

**Abstract:** This paper aims to examine the development process in natural area tourism in Britain from the viewpoint of tourist behaviour. First, the tourism development process in the Lower Wye Valley area in the late 18th century is traced by analysing historical data such as travel accounts and guidebooks published in this era. These confirmed that the River Wye Cruise from Ross-on-Wye to Chepstow was not popular in the 1770s yet, by the 1790s it had become established as a famous tourist route. The trigger for this change was Gilpins' publication of his 'Observations on the River Wye' in 1782. The paper then discusses how the sequence of vistas on the Wye Cruise, as described by Gilpin, enriched the totality of the tourist experience. Together the Wye Cruise and Tintern Abbey, already the most famous tourist site in the valley, increased the attraction of the area to those members of the middle class who aspired to be seen as a more 'educated person'. This was the driving force of the popularization of the River Wye Cruise as a famous tourist route.

**Keywords:** ピクチャレスク旅行 (picturesque travel (tour)), W. ギルピン (William Gilpin),  
 ワイ川下り (River Wye cruise), ティンターン僧院 (Tintern Abbey),  
 旅行記 (travel accounts)

## はじめに

グランド・ツアーは、英国人の風景の見方の変化に大きな影響を与えた。彼らは、イタリアの古代遺跡を見て回り、当時のイタリアが理想とした風景が描かれた風景画や彫刻を持ち帰り、自宅に飾るようになる。また、とくに穏やかな丘陵のひろがるイングランドの人びとにとって、イタリアへの往復に経験するアルプス越えは、自然のもつ荒々しさや偉大さを体感する、格好の契機となっ

た。

帰国した彼らは、グランド・ツアーでの見聞を、自国で追体験しようとする。18世紀になると、イタリアの風景画に描かれた古代神殿風の建物や廃墟などが、庭園の中に取り入れられるようになった。さらに、18世紀後半になると、当時のイタリア絵画が理想とした古代の静謐な田園風景や、アルプスの雄大な風景を、一枚の「絵」として構成することに考えをめぐらせ、そうした対象を、自国の中に見出そうとすることで、自然地域

\* 立教大学観光学部・教授

を舞台とした国内旅行が盛んに行われるようになる。

このようなクランド・ツアーの国内版とでもいうべき国内旅行は、とくに、当時英国で流行した美学上の概念を冠して「ピクチャレスク<sup>1)</sup>旅行 (picturesque travel, picturesque tour)」と称された。これを一般にひろめ、英国の実際の風景美の「発見」を促すのに多大な貢献をしたのが、ギルピン (Gilpin, W.) による一連の旅行記の出版である。彼は、自らの旅行体験をもとに、まず『ワイ川ならびに南ウェールズ探勝』“Observations on the River Wye and several parts of South Wales, &c. relative chiefly to Picturesque Beauty” (1782) を発行した (以下、『ワイ川探勝』と表記)。その後、湖水地方 (1786)、スコットランド・ハイランド地方 (1789) 等を対象とした旅行記を、相次いで出版することになる。<sup>2)</sup>

今でこそ、英国を代表する自然観光の目的地となっているこれらの地域は、イングランドからみればいずれも「周縁部」に位置する。これらの地域の風景が注目され、実際に多くの人びとが訪れるようになるのは、18世紀後半になってからのことである。世紀末には、フランス革命の影響で英国人の大陸渡航が制限されたという、当時の国際情勢も、この流行を後押しした。

本稿でとりあげるワイ川 (River Wye) の下流域は、ギルピンが最初に旅行記を出版し、18世紀末には典型的なピクチャレスク旅行の目的地として注目を集めた地域である。本稿では、現在のイングランドと南ウェールズの境界地域に位置する当地域が、いかなる経緯を経て注目される観光地域となっていたのか、当時の様子を伝える旅行関連史料 (旅行記、案内書等) をもとにたどったうえで、筆者の専門とする観光行動論的な視点から、若干の考察を加えることとしたい。<sup>3)</sup>

## I ワイ川下流域の観光利用の始まり

ウェールズ中部のカンブリア山脈を水源とするワイ川は、南東方面に流路をとり、イングランドと南ウェールズを隔てるセヴァーン川に注いでいる。下流域は一般にワイ溪谷 (Wye Valley) と呼ばれ、とくにロス・オン・ワイ (Ross-on-Wye,

以下、「ロス」と表記) から河口までの流域は、ところどころ大きく蛇行し、起伏に富んだ緑と岩肌が連続する河畔に、城跡等の建物が点在する。ロスからモンマス (Monmouth) までは概ねハフォード州 (イングランド)、モンマスより下流はモンマス州 (南ウェールズ) に属し、モンマスからは、ほぼ現在のイングランドと南ウェールズの境界線に沿って流れている。<sup>4)</sup>

楽しみを目的としたワイ川下りは、少なくとも1740年代後半に始められていた。45年12月にロスに任じられた教区牧師 Egerton J. が、赴任後、毎年夏に友人とワイ川下りを楽しんでいたという (Heath, 1799)。

この流域で、より早い時期から知識層に注目されていたのが、ワイ川の河口の町チェプストウ (Chepstow) から6マイル (約9.6 km) さかのぼった河畔に位置するティンターン僧院 (Tintern Abbey) であった。12世紀にシトー修道会によって建設されたこの僧院は、その後拡充されたが、16世紀にヘンリー8世の宗教改革によって解体され、廃墟に帰した。ティンターン僧院は、すでに1732年に、バック兄弟 (Samuel & Nathaniel Buck) が著した『英国の遺跡集 (Antiquities of Great Britain)』の中でその全容が版画で描かれ、1742年には、詩人 Sneyd Deivies によって紀行詩の題材とされている。

## II ギルピンによる「ワイ川下り」とその影響

### 1) 「ワイ川下り」のコース

ギルピンがワイ川を訪れたのは1770年の夏のことであった。彼はロスで屋根付きの小舟を借り、3人の漕ぎ手を雇って、1泊2日かけてワイ川下りを経験した。両日ともに、約20マイル (約32 km) の行程である。

『ワイ川探勝』では、川下りのコースに沿ってその移りゆく風景が描写されている。1日目は、ロスを発って、まず河畔右手の丘に堂々とした姿を見せるグッドリッチ城跡 (Goodrich Castle) に立ち寄り、溪谷美に富むニュー・ウィア (New Weir) の岩場を散策し、モンマスに宿泊する (図1)。2日目に立ち寄るティンターン僧院につい

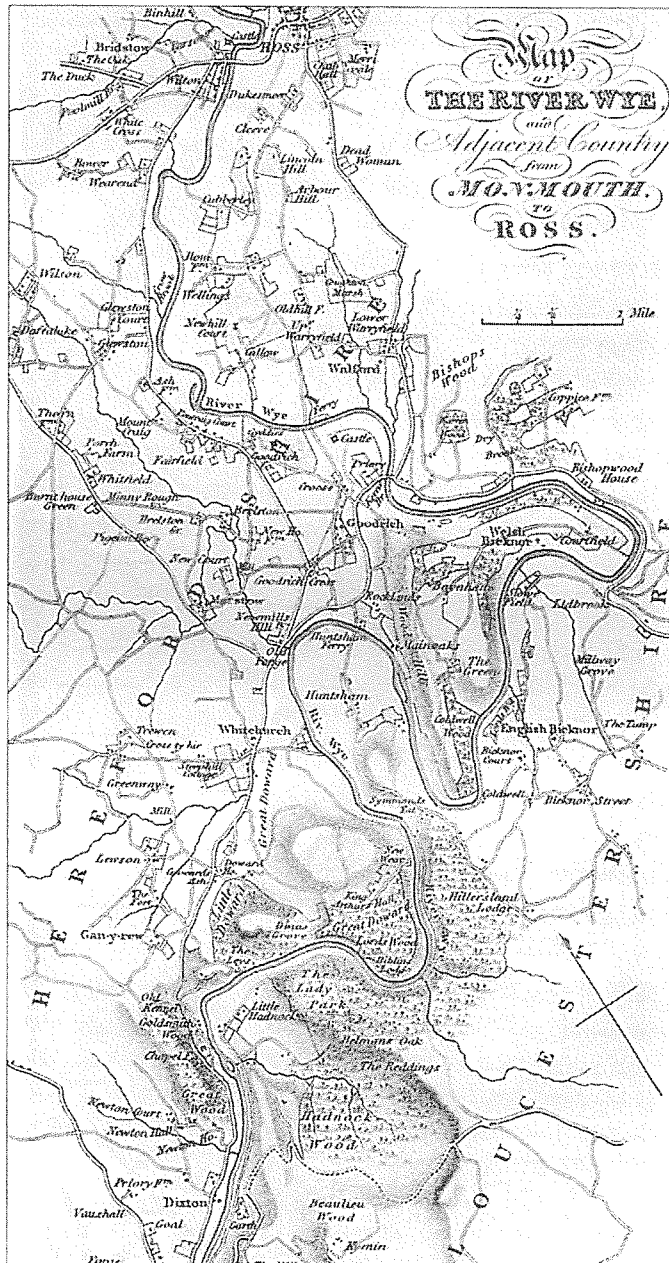


図1 1日目のコース(ロースーモンマス)

出典：Thomas Roscoe "Wandering and Excursion in South Wales, 1837"<sup>51)</sup>

では、ギルピンも「ワイ川でもっとも美しく、もっともピクチャレスク（第4節）」と評している。その後、漕ぎ手の先導でピアスフィールド公園（Piercefield Park）に登り、そこから、これまで下ってきたワイ川を見返し、また反対方面の、チェ

プストウの町越しにセヴァーン川河口がひろがる風景を俯瞰してから、チェプストウへと向かうものであった（図2）。

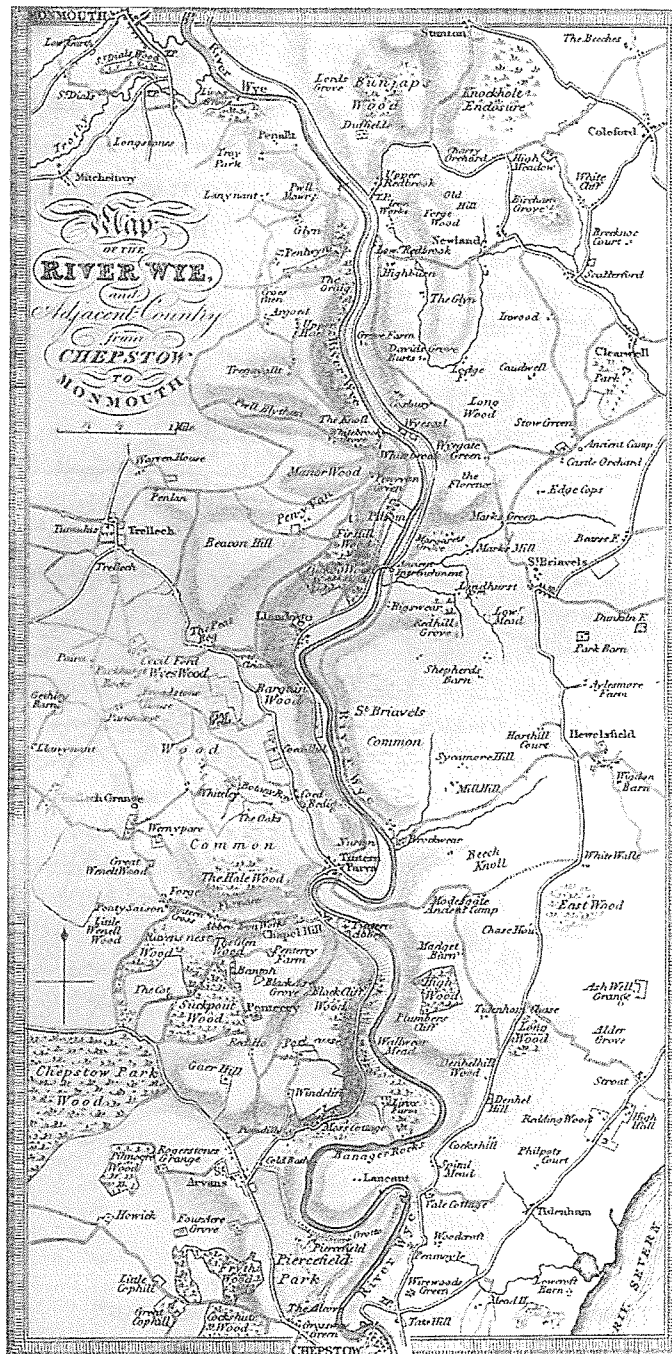


図2 2日目のコース(モンマスーチェpstow)

出典：Thomas Roscoe 'Wandering and Excursion in South Wales, 1837'<sup>6)</sup>

## 2) 『ワイ川探勝』発行の影響

『ワイ川探勝』は発売後すぐにベストセラーとなり、川下りの起点となるロスの町も賑わいを見えるようになる (Robinson, 2002)。

ギルピンによる挿絵は、彼自身の展開する絵画論に沿って実際の風景を理想化して描いたものであり、もとより、風景を正確に描写しようと意図したものではない。<sup>7)</sup>しかし『ワイ川探勝』の読者に、この点が正確に理解されていたわけではなかった。『ワイ川探勝』が実際に発行された翌年の1784年早々、ギルピンは、知人からこの点を批判した手紙を受けとる。内容は、「君は風景の描き手としてはまったくの裏切り者だ。旅行者が実際に君の本をもってワイ川下りに出かけても、漕ぎ手は、「その本に描かれているような風景を実際に見ようとしても無駄だ」と旅行者に叫ぶだろう。実際、ある貴族が本の内容を確かめにワイ川を訪れたが、ギルピンが書いた内容はまったく事実ではないことに気づかれた」というものである (Barbier, 1963, p71)。

これに対してギルピンは、自らの信念に沿って反論しているが、ここで重要なのは、『ワイ川探勝』が発行されたまさにその年に、それを手に実際にワイ川下りを体験した旅行者が存在したという点である。同様に、『ワイ川探勝』を携えて川下りをする旅行者は、1780年代後半や90年代に入ってから、記録に残されている (Manwaring, 1965)。

『ワイ川探勝』は、初版として700部が刷られた後、1789年と92年に版を重ね、1800年には4版と5版が出されている。4版は図版なしの携帯に便利なサイズのものであり、5版は、磨耗した図版を刷新した版であった (Barbier, 1963)。このことから、当時、この本がひろく読まれていたこと、そして実際にそれを持参してワイ川下りを経験した人が少なからず存在したであろうことが伺える。

1790年代になると、『ワイ川探勝』に触発された旅行案内書が編纂されるようになる。もっともよく知られていたのは、地元モンマスのHeathによるもので、彼はこの地域について書かれた文章を集め、自ら旅行情報を書き添えた案内書の編

集・出版を手がけた(『ティンターン僧院(1793)』、『ワイ川下り(1796)』)。当然のことながらギルピンの文章も盛り込まれているこのシリーズは、携帯を意図した廉価なものであった。これらは、1800年代に入ると州内のすべての宿で販売されるようになり (Hebron, 2006)、1820年代まで何度も版を重ねるロングセラーとなる。また、ワイ川を源流部から順次紹介している案内書 (Ireland, 1797) の序文では、もし彼 (ギルピン) が訪れたら注目したであろう場所、彼がすでに知っていたら (とりあげることを) 認めるであろう場所を、文章と挿絵で紹介していることが指摘されている。

旅行案内書が流布する18世紀末には、実際に少なくとも8隻の舟がロスとチェブストウの間を往来し、旅行者を運んでいた。それらの舟には、日よけ・雨除けの屋根がつき、絵や書き物のための机が備えられていた (Moir, 1965)。また、通常、舟は宿で借りることができ、大きさも、6人乗りのものから20人まで乗れるものまであった。最大規模のものは、座席は座布団つきで日よけのカーテンが備えられ、カーペットが敷かれ、ワインや軽食が用意されていた (Hebron, 2006)。

かくして、この時期には、ワイ川下りは「国内でもっとも人気の高いツアーのひとつ」 (Moir, 1965, p125) となっていた。なお、料金は、通常同行する3人の漕ぎ手への報酬とは別に、ギルピンの川下りで1日目の行程にあたるロスからモンマスが1ギニー半、2日目のモンマスからチェブストウも同額であった (Heath, 1796)。

## Ⅲ ティンターン僧院の訪問者

バック兄弟による『英国の遺跡集』(1732)の発行以来、それまで一部に限られていた遺跡や廢墟への関心が高まり、とくに優美な姿で知られるティンターン僧院は、18世紀半ばには聖職者や貴族階級の間にもひろく浸透してゆく。そして、『ワイ川探勝』が発売される頃には、すでにウェールズを代表する遺跡として、ひろく知られる存在となっていた。<sup>8)</sup>

とくに画家にとって、18世紀後半は、旅装を軽くする画材として水彩画の使用がひろまり、明

暗の対比にすぐれた腐食銅版画技法であるアクアティントが英国に紹介された時代（1770年代）であった。当時は、著名な画家が旅行者に同行する形で作品を残す場合も多く、多彩な表情をもつ自然風景と多くの遺跡をもつウェールズは、画家が頻繁に訪れる場所として知られるようになっていた。とくにティンターン僧院は、彼らの格好の画題とみなされ、実際に多くの画家がこの僧院を訪れ、作品を残している。<sup>9)</sup> 1790年代には、若き詩人・ワーズワス（Wordsworth, W.）が2度訪れ、この僧院の名を冠した有名な詩を書いている。

ティンターン僧院は、画家や詩人が創作活動の糧として訪れるのみならず、少なくとも1780年代はじめには、すでに楽しみの要素が色濃い旅行目的地とみなされていた。<sup>10)</sup> 80年代以降の訪問者層のひろがりや、現在に残されている画家の作品からも伺える。1784年の版画（図3）では、道路から廃墟を眺め、沈思する趣の単独の旅行者（右下）と、壁越しに会話を交わす旅行者たち（左下）とが、同時に描かれている。また、ターナー（Turner, J.M.W.）が17歳のときに訪れたときのスケッチをもとにした水彩画（1794）には、ドレスを着た婦人を伴った貴族階級らしき旅行者が、僧院内部で地元の労働者と話をしている様子が描かれている。

19世紀初頭には、上流から水路でチェプストウへ向かう途中に立ち寄る場合、僧院での滞在が許されるのは最大2時間であると、旅行案内書に注意書きがされるようになる（Heath, 1801）、同書には、僧院を見ている間に食事を手配するサー

ビスも記載されている。

#### IV 考察

##### 1) 「ワイ川下り」定番化の過程

ギルピンによる「ワイ川下り」は1770年の夏のことであった。少なくとも40年代後半に楽しみのために行われていた川下りが、70年には、ロスからチェプストウまで1泊2日で下るコースが、すでに商いとして成立していたことになる。

しかし、1774年と77年にウェールズを旅行した代表的な旅行記<sup>12)</sup>をみると、ワイ川下流域に関しては、ともに旅行開始直後に下流のチェプストウからティンターン僧院へ往復するのみで、ギルピンのたどったロスからの川下りは経験していない。これらの旅行記は、まだ旅行者が少ない1770年代にウェールズを広範囲に旅行したものとして、当時ウェールズ旅行を企てている人びとの「必読書」（Kenyon, 1998, p16）とみなされていたことから、1770年代には、ワイ川下りがひろく知られていたとはいえないと考えるのが妥当であろう。

また、1770年には、ギルピンの数週間前に、晩年の詩人グレイ（Gray, T.）が同じ川下りを経験している。川下り後にグレイが友人に宛てた書簡の中で、モンマスの町は気に入ったが、この町が言及されるのを聞いたことがないと言っている。<sup>13)</sup> 当時は、イングランドとウェールズの境界にあたるこの地域自体が、ひろく知られてはいなかったといえる。

その後ワイ川下りは、90年代には多くの旅行者が利用する「定番コース」として、英国内でひろく知られる存在となった。すでに見たとおり、『ワイ川探勝』は版を重ね、この本を携えて実際に川下りを体験する旅行者を集めた。さらには、新たな旅行案内書の誕生を促している。このように、ギルピンによる『ワイ川探勝』の出版が、この地域が注目されるようになった直接の契機であったことは、18世紀末にすでに指摘されている。<sup>14)</sup>

18世紀末に存在した、一度に20人乗れる舟（船）は、人数的にも不特定多数の訪問者の同時利用を想定したものと考えられるし、装備やサービスにしても、現在の観光者を対象としてもおか



図3 ティンターン僧院（Grose, F., 1784）<sup>11)</sup>

しくないものである。川下りが、(ターナーが描いたような)ドレスを着た婦人の利用にも対応していたことは、容易に想像できる。

## 2)「ワイ川下り」の物語性

英国の特別自然景観地区 (Area of Outstanding Natural Beauty) に指定されているワイ川下流域は、現代もとくにカヌー下りとウォーキングで知られ、川が大きく蛇行する姿が一望できる地点 (Symonds Yat Rock) からの眺望は、英国を代表する自然風景として頻繁に紹介されるものである。たとえ『ワイ川探勝』が発行されなかったとしても、いずれは観光面で有名となった地域であろう。

「ワイ川下り」のコースは、旅行者の「感動」のプロセス (橋本, 1997 他) の視点からみても興味深い。まさにギルピンが紹介するとおり、出発して間もなく河畔に重厚な姿を見せるグッドリッチ城の遺跡に迎えられることがコースの「導入部」としての役割を果たしている。その後、大きく蛇行する河畔の溪谷美を觀賞し、眺望施設からの眺めを堪能してモンマスで1泊する。2日目には、「クライマックス」としてのティンターン僧院に向かい、その優美さを愛で、かつてそこを訪ねた画家や文人に想いをよせる。その後、ピアスフィールドからワイ川ならびにチェブストウの町を俯瞰して、一連のコースの「余韻」をかみしめることができる構成となっている。1818年に出版され、19世紀を通じてひろく流布したワイ川下りの案内書<sup>15)</sup>は、1日目 (ロスからモンマス) の風景を「威厳と美 (Grand and Beautiful)」, 2日目 (モンマスからチェブストウ) を「崇高と畏怖 (Sublime and Awful)」と、両日それぞれに楽しめる風景の性格の違いを表現している。

なお、この流域は一般にワイ溪谷と称されるものの、日本の溪谷ほど流速は早くない。大きく蛇行し、さまざまな表情を見せるこの流域を、舟というヒューマン・スケールの移動手段で下るために、個々の風景のシークエンスが途切れることなく、觀賞をより一層、印象深いものとしている。

## 3)「ワイ川下り」とティンターン僧院の関係

ティンターン僧院は、18世紀半ば以降になると、遺跡に関心のある限られた人びとだけではなく、多くの画家、そして後には詩人の創作活動を刺激する存在として知られるようになる。まさに彼らにとっての「歌まくら」(川崎, 1988, p5) の地として彼らをひきつけていたことになる。事実、多くの画家の題材とされ、またギルピンを含む初期の旅行者によって旅行記や案内書の中で紹介されることで、より多くの人びとをひきつける「名所」としての力をもつようになってゆく。

「ワイ川下り」が評判を呼び、定番コースとして成立しえたのは、単独でも誘引力をもつこの僧院が存在していたからであったことは間違いない。それと同時に、ティンターン僧院が「ワイ川下り」というひとつの物語を構成するハイライトとして観光コースに組み入れられることで、旅行者が、より印象的なアプローチ手段に沿ってこの僧院を訪れることを容易にした。

このように、僧院の存在は、ワイ川下流域全体を魅力的な観光地域とするに欠かせない存在であったと同時に、観光コースの一部となることで、僧院自体もまた、流域内の他の観光対象との有機的な関係性をつよめ、より多くの人びとにとっての「名所」として新たな輝きを増すことになった。観光コースとしての「ワイ川下り」と僧院とは、このような相互関係にあったと考えられる。

なお、ティンターン僧院の訪問を目的としてワイ川の他の立ち寄り地には関心がなかった旅行者が、ワイ川下りが有名になることでそれを利用するようになると、地域内での立ち寄り地も増え、結果として描かれる行動軌跡も、より広範囲なものとなる。この点を回遊行動の誘導手法の視点からみると、「定番提示法」<sup>16)</sup>が有効に機能している事例とみなすことができる。

## 4)「ワイ川下り」

既述のとおり、ギルピンの一連のピクチャレスク旅行記は、少なくとも、正確な記述という意味では、いわゆるガイドブックとは一線を画すものである。しかし、当時の日本で言えば、彼は「名所図会」のように図版入りでわかりやすく読者に

アピールすることで、それまで関心の低かった英国内に、訪れる価値のある自然が数多く存在することをひろく知らしめた。そして実際に自然地域を訪れる旅行者を数多く生んだのであり、当時の社会に与えた影響はきわめて大きかった。

この動きにおおいに刺激を受けたのは、グランド・ツアー経験者ならびにそれに参加するほどには裕福ではない貴族階級に加え、産業革命の恩恵を受け、当時急速に増加した中流階級の人びとであった。風景の中に「ピクチャレスク」を見出せるためには、絵画に通じた教養人でなければならない（高橋，1998，p156）。上流階級にあこがれ、自らも絵を理解できる存在でありたいと願う彼らにとって、ピクチャレスク旅行に出かけることは、自らがそうした「審美眼」をもつことを周囲に誇示するまたとない機会となった。しかし実際には、経験も知識もない。かくして、その手には、ギルピンの旅行記のような、風景を見る際の「手本」が必要とされたのであった。

18世紀後半、自然風景への関心が高まるなかでワイ川下流域がにわかに注目されることとなった理由としては、まず、この地域がそれにふさわしい風景的な魅力をもっていたことがあげられる。そうでなければギルピンもとりあげるはずがないし、たとえとりあげたとしても関心が持続しようがない。それに加えて、イングランドから遠くないという立地的条件と、移動に苦痛を伴う陸路よりもはるかに快適な「舟下り」という移動手段であったこと、そして、「1泊2日」という短期間に、案内つきで、容易に「ピクチャレスク体験」に参加できるという条件が揃っていた。

このように「ワイ川下り」は、教養人を気取りたい層のニーズの受け皿としても、格好な存在であった。そして、ギルピンの著作以降も、Heathによる案内書のような、彼らのニーズに的確に応える旅行情報の提供がなされたことが、人気の持続を後押ししたのである。

#### おわりに

「ピクチャレスク旅行」は、18世末以降、ギルピンらの本を読みながら通り過ぎ、現地で実際の風景を「見ようとしなない」旅行者の姿が、さま

ざまな形で批判された。<sup>17)</sup>

しかし、観光学的にみれば、ピクチャレスク旅行が流行したことで、限定された一部の人からより多くの人びとに、実際に自然地域に旅行する道が開かれたことが、何よりも重要である。上記のような、批判・風刺の対象とされた旅行者の姿にしても、カメラやビデオでの撮影に余念がない現代の観光者と大差ない。現在の英国の自然地域における観光行動の初期の形態としてみても、また、現代に通じる観光や観光行動の不易と流行を理解するうえでも、この時代の旅行は、興味深い研究材料を提供してくれるのである。

#### 注

- 1) ピクチャレスクは、当時の英国で人気を博したクロード・ロラン（Lorrain, Claude）やニコラ・プッサン（Poussin, Nicolas）と義弟ガスパール・プッサン（Poussin, Gaspard）、サルヴァトーレ・ローザ（Rosa, Salvator）の絵が想起されるような風景の魅力（高橋，1998）を意味し、旅行のみならず、造園や建築等、当時の文化に多大な影響を及ぼした。英語の *picturesque* は17世紀末に使用されるようになり、「力強く生き生きとした」絵画の制作法を意味した。それが文学の様式に適用され、「鮮明な」、「生き生きと表現されている」意味に用いられるようになった（講談社『オックスフォード西洋美術事典』1989）。
- 2) ギルピンは1768年からの10年あまりの間に英国内を精力的に旅行し、そのときのスケッチをもとに一連の「ピクチャレスク旅行記」を著した。すでに70年代半ばには、数多くのスケッチが盛り込まれた彼の旅行記録（湖水地方）の稿本が、知人や上流階級の間で評判となり、出版が勧められていたが、多くの図版をいかにして鮮明に複写するかという印刷の技術上の問題が解決できなかった。その見通しがたったのは80年代に入ってからのことである。そして、彼が真のピクチャレスクな目的地と見なしていた自らの出身地・湖水地方の著作を世に問う前に、まずは分量の少ない『ワイ川探勝』が試験的に出版されることとなった（Barbier, 1963）。なお、『ワイ川探勝』は表紙に「1782年」と発行年が印刷されているが、当時の英国で最新の技術であったアクアティント（腐食銅版画技法）の導入に手間どり、実際には翌83年夏に発行されている。ギルピンの生涯やピクチャレスク理論についてはBarbier（1963）が詳しい。日本語のものとしては、ギルピンを含めたピクチャレスク理論については利光（1985）、安西（1989）、大河内（2003）、彼の旅行記発行の経緯については南井（2004）等の論考がある。
- 3) 「ピクチャレスク旅行」については、1920年代に初期のピクチャレスク論の中でとりあげられ（Manwar-



- ing, 1925, Hassey, 1927), その後も文学や歴史学, 芸術論等の枠組みの中で言及されてきた。近年のものとしては, Andrews (1989), Ousby (1990) 等が詳しい。観光研究の領域では, 16 世紀以降の西洋観光史に関する文献 (Towner, 1996) や, Ryan (2003) による英語圏の観光史の紹介にしても, この時代にかんする記述は, 上記のような関連領域の成果の紹介が中心となっている。
- 4) 当時のモンマス州は, 宗教制度上はウェールズ教会の下, 司法上はイングランドの管轄下という, 複雑な位置にあった (吉賀, 1999)。
  - 5) Jeremiah, 2004, 図 103 より転載。
  - 6) Jeremiah, 2004, 図 141 より転載。
  - 7) ギルピンは, バーク (Burke, E) の「美の理論」(Burke, 1757) に依拠して, 「美しいもの」の構成要素として「滑らかなもの (smoothness)」, 「整然としたもの (neatness)」を挙げ, ピクチャレスクはそれらに対して「荒々しいもの (roughness)」, 「ごつごつしたもの (ruggedness)」から構成されるとし, 荒々しい部分がひとつの全体に統一されている構図をよしとした (Gilpin, 1792)。したがって人工物よりも自然の中にその要素は多く見られるが, 滑らかな建物も荒々しく変えることで, ピクチャレスクになるという。本稿でとりあげているティンターン僧院のような「廃墟」は, その典型的な姿である。このような考えを, 絵画の枠組みを超えて, 実際に自国の自然風景の中に見出そうとしたことが, ギルピンの目新しさであった。
  - 8) Wyndham (1781) は序文で, ウェールズの「すでに頻繁に紹介され, 知られすぎているロマンティックな遺跡」のひとつとして, チェブストウ城やコンウェイ城などとともに, ティンターン僧院を挙げている。
  - 9) 例えば, 1770 年代には英国にアクアティントを紹介したとされる Sandby, P (1773 に訪問) や Wyndham のウェールズ旅行に同行した Grimm, S.H. (1777), 80 年代には Dayes, E (1787), 90 年代には Turner, J.M.W. (1792, 1798), Girtin, T. (1793) 等がいる。
  - 10) 1781 年にティンターン僧院を訪ねた旅行者 Byng は, ティンターンを楽しむには, 馬の餌とともにワインや食事を持参し, 廃墟にテーブルを広げることであり, パンやビール, (ウェールズ特産の) サーモンなどは地元の宿で手に入る, (有名な) ウェールズのハープ奏者はチェブストウから呼べるだろう, と記している (Andrews, 1934, p24)。
  - 11) Woof and Hebron (1998), p135 より転載。
  - 12) Wyndham (1775) ならびに Wyndham (1781)。
  - 13) Toynbee & Whibley, 1935, p1142。
  - 14) 後にロングセラーとなる『ワイ川下り』初版 (1796) の序文で, Heath は, 風景を見るための出版物への関心をかきたてたのは, ギルピンの出版物以来のことであると明記している。
  - 15) Fosbroke による 'The Wye tour or Gilpin on the Wye' は, ギルピンの記述の多くを引用し, 1818 年の初版以来, 19 世紀を通じて版を重ねたこの地域の著名なガイド本である。19 世紀にこのような出版物がロングセラーとなること自体が, この地域の人気とギルピンの影響の息の長さを示すものであるが, その初版 (Fosbroke, 1818) の中で, 両日の川下りを紹介する章扉に, それぞれこのように明記されている。
  - 16) 主目的地が定まったときに副目的地をセットとして「ついで」を誘発することで, 地域内の観光回遊行動を促す手法 (橋本, 1997)。
  - 17) 文学や演劇で風刺の対象とされ, 果てはギルピンを模した旅行記の形をとった風刺詩集などが話題となった。詳しくは川崎 (1988), 岩崎 (2002) 等参照。

### 参考文献

- Andrews, M. (1989) *The Search for the Picturesque*, Stanford: Stanford University Press, 269 p.
- 安西信一 (1989) : ピクチャレスクの美学理論—ギルピン, プライス, ナイトをめぐる, 美学, 40(2), 36-49.
- Barbier, C. P. (1963) *William Gilpin*, Oxford: Clarendon Press, 196 p.
- Burke, E. (1757) *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*, London: printed for R. and J. Dodsley. (=中野好之訳 (1999) 崇高と美の觀念の起源. みすず書房, 220 p.)
- 橋本俊哉 (1997) : 観光回遊論. 風間書房, 361 p.
- Hassey, C. (1927) *The Picturesque: Studies in a point of view*, London: Frank Cass, 308 p.
- Hebron, S. (2006) *The Romantics and the British Landscape*, London: The British Library, 336 p.
- 岩崎豊太郎 (2002) : ロマン主義の詩と絵画. 英潮社, 224 p.
- Jeremiah, J. (2004) *The River Wye: A Pictorial History*, Chichester: Phillimore, 134 p.
- 川崎寿彦 (1988) : ティンターン僧院の風景—ピクチャレスクからロマン主義への移行. 川崎寿彦編, イギリス・ロマン主義に向けて, 名古屋大学出版会, 3-39.
- Kenyon, J. R. (1998) *The Tourist in Wales in the Later Eighteenth and Early Nineteenth Centuries*. ウェールズ国立美術館・岐阜県美術館編, ウェールズ紀行—歴史と風景 ウェールズ国立美術館所蔵英国水彩画 1675-1855, 岐阜県美術館, 15-18.
- Manwaring, E. W. [1925] 1965 *Italian Landscape in Eighteenth Century England*, London: Frank Cass, New York: Oxford University Press, 243 p.
- 南井正廣 (2004) : ウィリアム・ギルピンの生涯とその出版をめぐる—復刻集成ウィリアム・ギルピン ピクチャレスク旅行記および関連著作・評伝 別冊付録. ユーリカ・プレス, 27 p.
- Moir, E. (1964) *The discovery of Britain: The English tourists, 1540-1840*, London: Routledge & Kegan Paul, 183 p.

- 大河内 昌 (2003) : 崇高とピクチャレスク. 小森陽一他  
編, 岩波講座文学7 つくられた自然, 岩波書店, 175-194.
- Ousby, I. (1990) *The Englishman's England*, Cambridge: Cam-  
bridge University Press, 244 p.
- Robinson, D. M. (2002) *Tintern Abbey* (4 th.ed.), Carliff:  
CADW, 64 p.
- Ryan, C. (2003) *Recreational Tourism: Demand and Impacts*,  
Clevedon, Buffalo, Toronto, Sydney: Channel View Publica-  
tions, 358 p.
- 高橋裕子 (1998) : イギリス美術. 岩波書店, 245 p.
- 利光 功 (1985) : 美的範疇としてのピクチャレスク. 美  
学, 36(2), 1-12.
- Towner, J. (1996) *An Historical Geography of Recreation and  
Tourism in the Western World 1540-1940*, Chichester: Wiley,  
312 p.
- Woof, R. and S. Hebron (1988). *Towards Tintern Abbey, Gras-  
mere* : Wordsworth Trust, 188 p.
- 吉賀憲夫 (1999) : ウェールズ再発見 (その3) 1770年か  
ら1824年のウェールズ旅行とロマン派詩人. 愛知工業大  
学研究報告, 34(A), 73-80.

#### 一次資料ならびにその編集資料

- Andrews, C. B. ed. (1934) *The Torrington Diaries: Containing  
the Tours through England and Wales of the Hon. John Byng  
(Later Fifth Viscount Torrington) Between the Year 1781 and  
1794*, vol.1, London: Eyre & Spottiswoode.
- Fosbrooke, T.D. (1818) *The Wye tour*.
- Gilpin, W. (1782) *Observations on the River Wye and several*

- parts of South Wales, & c. relative chiefly to Picturesque Beau-  
ty*., Andrew, M. ed., (1994) *The Picturesque: Literary Sources  
and Documents*, Vol.1., Robertsbridge : Helm Information,  
243-278.
- Gilpin, W. (1792) *Three Essays: Essay I. On Picturesque Beau-  
ty*., Andrew, M. ed., (1994) *The Picturesque: Literary Sources  
and Documents*, Vol.2., Robertsbridge : Helm Information,  
7-18.
- Heath, C. (1793) *Descriptive account of Tintern Abbey, Mon-  
mouthshire*.
- Heath, C. (1796) *The Excursion down the Wye from Ross to  
Monmouth*.
- Heath, C. (1799) *The Excursion down the Wye from Ross to  
Monmouth*.
- Heath, C. (1801) *Monmouthshire. Historical and descriptive  
accounts of the ancient and present state of Tintern abbey,  
including a variety of particulars relating to that much-admired  
ruin*.
- Ireland, S. (1797) *Picturesque Views on the River Wye*.
- Toynbee, P. and L. Whibley eds. (1935) *Correspondence of  
Thomas Gray* (3 vol.) Oxford: Clarendon Press.
- Wyndham, H. P. (1775) *A Gentleman's Tour through Mon-  
mouthshire and Wales in the months of June and July, 1774*.
- Wyndham, H. P. (1781) *A tour through Monmouthshire and  
Wales: made in the months of June, and July, 1774. And in the  
months of June, July, and August, 1777*.